

「故郷」 再研究

教科書に長く掲載され、
多くの人に親しまれている「故郷」。
本特集では、

「故郷」を翻訳された先生にお話を伺ったり、
さまざまな授業実践を紹介したりする中で、
これまでとは違った視点で、
この作品の魅力をもひも解いていきたいと思います。

翻訳者から見た「故郷」

● インタビュー

東京大学教授・中国文学者

藤井省三

五年前に「故郷」の新訳を発表した藤井省三先生は、魯迅をはじめ中国文学の研究者として広く活躍されています。今回のインタビューでは、教科書に掲載されている竹内好訳の特徴や、藤井先生が翻訳するときに心がけたこと、作品としての「故郷」の魅力などについて伺いました。

「歯切れのよい」竹内訳

——教科書では、竹内好（一九一〇—一九七七）が訳した「故郷」を掲載しています。「故郷」はこれまでにいろいろな方によって翻訳されていますが、その中でも、竹内訳が広く親しまれている理由はどこにあるのでしょうか。

これまで、佐藤春夫など二十人近くが「故郷」を翻訳してきました（※1）。その中でも、竹内さんの翻訳が多くの人に読まれている理由の一つに、読み手にとつての「わかりやすさ」が挙げられると思います。

魯迅の文章には一文がとても長いという特徴があり、そのまま日本語に訳そうとすると難解なものになってしまうんです。そのため竹内さんは、原文にある長い一文をいくつかの短文に置き換えています。原文と比べて数倍の句点「。」を使い、歯切れのよい文章にしたんです。ですから、中学生の子どもたちにもわかりやすく、読みやすいと思います。

竹内さんは、「魯迅の思想のすばらしさをどうわかりやすく伝えるか」に重きを置いて翻訳していた人です。そのため、「魯迅の文体」というよりも、論理的でわかり



写真：鈴木俊介

やすい「竹内好の文体」になっていると、私は感じます。

翻訳するときに心がけたこと

——藤井先生が翻訳するときは、「魯迅の文体」を伝えることに注力したそうですね。

魯迅は、明治・大正時代の日本文学や十九・二十世紀のヨーロッパ文学を非常によく勉強していて、芸術性の高い文章を書いていきます。私は、その文体の魅力を十分に伝えたいと思いました。先ほども述べましたが、魯迅の文体は、長文による迷路のような思考表現を特徴としています。

例えば、「故郷」の、語り手が思い悩む最後の場面（三年教科書P121L3～7）。竹内さんは「～願わない。～願わない。～願わない。」と、句点で三つに区切って歯切れのよい明快な文章にしています（右下参照）。しかし、原文のこの部分は、長い一文になっています。「願わない。」と言い切る事ができず、「願わないけれど、それでうまくいくのだろうか……」という、語り手の迷いが、そこに表れているともいえます。ですから、私は「望まないし、～望まない、～望まない。」と、読点でつなぎ、語

品を持ち帰ります。また、語り手とルントウは、少年時代からすでに平等な友人関係ではなく、それが二十年後の「旦那様……。」という言葉によって、さらに顕在化したといえるでしょう。

魯迅は「シュン坊ちゃん」という呼称により、裕福な家に育った語り手の未熟さを示したかったのではないかと、私は考えています。ですから、語り手の一人称に、「私」でなく、少年性を匂わせる「僕」という言葉を担当しました。

広がる「故郷」の読み

——異なる翻訳を読むことで、「故郷」の読みが広がりますね。竹内好も生前自身の訳が国語教科書に掲載されていることについて、「教材として利用される国語の先生は、（中略）できるだけ多数の訳文を彼我対照して、それらを参考にしながら自分の解釈をお決めになるのが賢明だと思う」と述べていたようです（※2）。

そもそも、藤井先生が「故郷」を翻訳しようと思ったきっかけは何だったのでしょうか。

私と「故郷」との最初の出会いは、やはり竹内訳でした。小学校五年生のときだっ

【竹内訳】

彼らが一つ心でいたいがために、私のように、むだの積み重ねで魂をすり減らす生活を共にすることは願わない。また、ルントウのように、打ちひしがれて心が麻痺する生活を共にすることも願わない。また、他の人のように、やけを起こして野放図に走る生活を共にすることも願わない。

【藤井訳】

彼らが仲間同士でありたいがために、僕のように苦しみのあまりのたうちまわって生きることを望まないし、彼らがルントウのように苦しみのあまり無感覚になつて生きることも望まず、そして彼らが他の人のように苦しみのあまり身勝手に生きることも望まない。

り手の苦悩を伝えるように訳しました。

魯迅の文章は、登場人物が悩んだり迷ったりするところで、どんな文が長くなつていくのが特徴です。ですから、翻訳するにあたり、どんなに長い文章でも句点は動かさないことを心がけました。中国語と日本語では文法構造が違うので難しい部分もありましたが、句点を増やさず、ダツシュ（一）で言葉をつなぐなどの工夫をして、魯迅の文体を崩さないようにしたつもりです。

——藤井先生の訳を読むと、竹内訳よりも登場人物の身分差がはつきりと描かれてい

たのですが、とても感動しまして、読書感想文の題材に選んだほどです（笑）。それから、魯迅作品に強く惹かれ、中学・高校と、竹内訳を繰り返し読んでいました。しかし、大学で中国文学を専攻し、原文で読むようになってからは、翻訳を読むことは

ほとんどなくなりました。

そして十四年前、中学・高校の国語研究会の先生方から『故郷』について講演をしてほしい」と頼まれたんです。そこで、国語の先生方の前で「中国で『故郷』がどのように読まれているか」などをお話しし

るのが印象的です。例えば藤井先生の訳では、ヤンおばさんや少年時代のルントウは、語り手を「シュン坊ちゃん」と呼んでいますね。

竹内訳では「シュンちゃん」としていますが、原文は、「迅哥儿」となっています。魯迅は夏目漱石の『坊っちゃん』を『哥儿』と中国語に訳したのですが、『哥儿』と呼ぶ側と呼ばれる側には、親近感と身分差が存在しています。ですから、私は「シュン坊ちゃん」としました。

ヤンおばさんは「シュン坊ちゃん」と呼ぶことで旧来の身分差を示唆し、堂々と物



魯迅の文体の魅力を十分に伝えたい——
そんな思いから翻訳を志しました。



ました。驚いたのが、講演後の質疑応答で、「竹内好はどうしてこのように訳しているのか」という、翻訳についての質問が実に多かったことです。

そこから、私は「故郷」の翻訳を改めて読み直しました。そして、魯迅の研究者として、さまざまな疑問を感じ、原文に近い翻訳をしたいと思うようになったのです。

そのような経緯があつて発行されたのが、新訳『故郷／阿Q正伝』（光文社古典新訳文庫）です。中学校の現場の先生方から「質問をいただいたことがきっかけとなって、生まれた新訳といえます。『故郷』を教える先生方には、授業の参考に、比べて読んでいただけたらうれしく思います。」

「故郷」の魅力とは

——「故郷」が教科書に掲載されて、約五十年が経ちます。藤井先生は、この作品を、生徒たちにどのように読んでほしいと

考えていますか。

中学三年生になると、高校受験を控え、徐々に社会の厳しさに直面していきます。そんなときに「故郷」を読んで、「迷ってもいいんだ」ということを感じてほしいですね。何事も順調に進むわけではなく、迷ったり悩んだりする中で人は成長していくんだということを、この作品から読み取ってほしい。それは、きっとその後の人生にも生きていくはずです。

それに、「故郷」は世代によってさまざまな読み方ができる作品でもあります。大人になってから読むと、また違った感じ方ができることでしょう。中学生の段階では、社会の貧困の問題や、最後の「希望」の部分に着目して読むと思います。しかし、大人になると、希望について述べる語り手に対して批判的に読むなど、もっと複雑な読み方ができる。それは魯迅が、多様な読みができるよう、巧みに文章を構成しているからです。

魯迅が「故郷」を書いたのは四十歳のときです。作家として円熟してきた頃ですが、混迷を深める中華民国の状況に苦悩するいつぼう、私生活でもさまざまな問題を抱えていて、人生に絶望を感じていました。その悩みや迷いを、円熟した芸術性で見事に描き切ったのが「故郷」です。

私は、研究者として迷いを感じるたびに魯迅の作品を読み、救われてきました。悩み迷うことの多い人生で、この作品は、生徒たちにとっても、きっと道しるべになってくれることでしょう。

※1 作家の佐藤春夫（一九〇二—一九六四年）をはじめ、中国文学者の高橋和巳（一九三二—一九七一年）など、戦前から数えと二十名ほどが翻訳している。そのうち、現在でも翻訳を読むことができるのは十名ほど。

※2 『教科通信』（教育出版・一九六九年十月一日刊）に「故郷」の訳者として」という一文で、竹内好が自身の翻訳について述べている。

ふじい・しょうぞう

一九五二年東京都生まれ。東京大学大学院博士課程修了。東京大学文学部教授。現代中国文学者。一九九一年魯迅研究により文学博士。二〇〇五年より日本学術会員。著書に「魯迅「故郷」の読書史」（創文社）など。訳書も多数。



悩み、迷うことの多い人生で、

「故郷」は道しるべになってくれると思います。